

## 御園生拓：モスクワ大学生物学部について Taku MISONOU: On the Faculty of Biology, Moscow State University

筆者は機会を得て、ソ連邦モスクワ大学生物学部大学院に1980年秋より留学し今春帰国した。そこで、ふだんあまり知られることのないソ連邦の生物学研究システムについて簡単に紹介したい。

日本では大学は教育とともに学術研究の中心でもあるが、ソ連では大学はあくまでも教育を主とした機関であり、研究も合わせて行なっている大学は全国でもそう多くはない（モスクワ大学、レニングラード大学等）。主に研究活動を行なう機関は大学とは別の科学アカデミーの研究所である。これらの研究所は専門分野によってかなり細かくわかれており（植物生理学研究所、微生物学研究所、光合成研究所等々）、それぞれ第一線級の学者が研究を行なっている。

筆者が籍をおいていたモスクワ大学はソ連邦最大の大学で、主に大学・専門学校の教員を養成することを目的としている。学部は5年、大学院は3年（外国人留学生は4年）で、学部卒業時に修士号、大学院修了時には博士候補（対外的には Ph. D.）の称号を与えることになっている。ソ連の博士号（Dr.）は日本とは異なり、博士候補を持つ者が研究職に就いて何年か研究活動を行ない、ある大きなテーマについての総説的な論文をまとめ、改めて審査を通してから与えられる。尚、生物学は学科ではなく学部としてまとめられており、その中に植物生理学科、生化学科、下等植物学科等の学科がおかれている。

生物学部内でも教育と研究はかなり切りはなされており、教員（教授・助教授・講師）と研究者（上級研究員・下級研究員・実験助手）は別系統の資格である。尚、教授・助教授は博士号、研究員は博士候補の資格を必要とする。もっとも、研究員は講義等は行なわないが、教員は多かれ少なかれ研究活動も行なっており、また科学アカデミーの著名な学者はたいてい教授の肩書きを持っていて大学等で講義を行なっている。地方大学の教員も科学アカデミーの研究所やモスクワ大学等に出張、または内地留学して研究を行なうことができる。

研究テーマは多岐にわたっており、全国的にみれば現代生物学のほぼ全ての分野をカバーしているといえる。そのテーマの決め方が実にソ連的である。例えば、研究も同時に行なっているモスクワ大学生物学部では、まず各学科でいくつかの大きなテーマを決め、そのテ

ーマに即したより細分化されたテーマを各研究室毎に決め、さらにそれらを具体化したテーマを各研究員が選ぶというシステムをとっている。そしてそれぞれのテーマについて、大学とは別の組織である「科学者ソビエト」（大学内外の専門の学者より成る委員会）の審査・承認を受けなければならないのである。これは科学アカデミーの研究所でも同様である。尚、この委員会は博士候補及び博士号論文の審査も行なう。

これらの審査においては、そのテーマの科学上の意義と同時にその研究の社会的意義が問題となる。一般にソ連ではこの点が重視されており、論文や学会発表の際などにも必ず社会への還元に触れているようである。

もっともこのようなテーマの決め方は、学科内の複数の研究者がまとまって一つのテーマに集中できる点では優れている。しかし、個々の研究者のテーマ選択の幅が日本などに比べて狭くなったり、研究者からのテーマに関する新しいアイデアがとりあげられにくいというような欠点があるように思える。

とはいえ、世界的な生物学の動向にはたいへん敏感である。世界の主要な学術雑誌はレーニン図書館等によくそろっており、研究者はそれぞれ世界の最新の情報をとり入れて仕事を進めている。

研究室の実験装置・器具などは日本と比べると貧弱であるという印象は否めない。特にガラス器具や薬品類などの消耗品は常に手にはいるわけではなく、ものによっては何ヶ月も品切れで研究者間で乏しいストックをやりくりするという状況もみられる。しかしこのような背景があるとはいえ、学部内に修理・技術部、ガラス細工部等があって、壊れた器具の修理や種々の実験装置・器具の製作を行なっている点は、あまりに使い捨ての感のある日本とひき比べて大いに考えさせられた。

研究者の健康には多大の注意がはらわれている。年一回の健康診断の他、有機溶媒等の有毒物質を扱う者には毎日牛乳の支給（0.5l）がある。また他の労働者と同じく年24日間の休暇があり、日曜・祭日には特別な場合を除き研究室には鍵がかけられてはいれなくなる。年中無休の日本の研究室も、少しは見習って余裕を持ってよいのではないだろうか。（184 小金井市貫井北町 4-1-1 東京学芸大学・生物）